

美術の窓(66)

古代古典美術の成立—飛鳥・白鳳・天平[4]
飛鳥美術(4)

大和文華館館長 吉川逸治

法隆寺金堂 法隆寺は天智九年(670)に全焼した。再建については、金堂が天武八年(679)までに完成し、五重塔・中門が持統七年(693)ごろできあがり、それらの塑像彫刻がそろったのが和銅四年(711)だという。この再建工事が行なわれていた時期に、伊勢の皇大神宮の式年遷宮が内宮では持統四年、外宮では持統六年に最初に制度として定められ、その建築形式が決定的になるし、新しい寺院建築としては薬師寺が天武9年(680)に発願されて、木殿に建立されるのであるから、はなはだ複雑で活発な建設の時代だったことが知られる。

再建法隆寺の金堂が、内陣を三分して中央に聖徳太子追善の釈迦三尊像を奉安し、東隣に用明天皇御発願の薬師像(原像は失われ、再建の際に鑄造されたらしい)、西隣には御母君の間入皇后の阿弥陀像(これも再建の際に鑄造されたものであろうが、のち失われ、運慶の子、康勝が古式にならって作っている)を安置し、それぞれ特徴的な大天蓋を上に架し、天蓋・尊像・須弥座と組み合わせ、釈迦・薬師・阿弥陀の三つの仏の小宇宙をば金堂内に配列している。聖徳太子の奉賛という特別な意図が、太子崩御後の半世紀間に豊富に発展した仏教思想の理想的な展示を伴って、この金堂に実現されており、四周の壁画の四仏浄土变相と八菩薩像がこの野心的な意図をさらによく物語っている。

金堂の内部は、折上げ格天井で

天空を象徴し、全体として、仏の世界を象徴する空間であって、ここに尊像を配置して、壁に仏画を描いて、この仏の世界を具体的に提示している。

建築は宇宙像の美術である、という誇らかな資格を示すのに、普遍的宗教の建築ほど適わしいものはない。キリスト教の教会堂建築もイスラーム教のモスク建築も地上における神の国を意味し、神の摂理の行なわれる理想的宇宙の象徴像である。だから堂内に高大な天上的空間を現出する。仏教寺院における仏塔も金堂もそれぞれ仏の宇宙を象徴する。そして、この宇宙像の建築形態として、東西世界が共通に、もっとも執着をもって追求したのが円蓋付き建築だったのである。

円蓋建築は、円墳形式から由来したか、あるいは円蓋形の石窟墳墓から発したか、遠い過去の起源にさかのぼることは予想されるが、これが記念堂として古代ギリシアの円形神殿、そのヘレニズム・オリエンティックの変種である八角円堂にさかのぼることはたしかである。さらにパルティア＝ササンのイランは第三の重要な円蓋建築を作りだした。すなわち正方形のプランに架かれた四壁の上に円蓋形を置いて円蓋を架すという形式のもので、この円蓋建築がビザンティン教会堂やイスラーム寺院の基本形式をなしている。

ところが、八角円堂やこの方形円蓋建築は、中央アジアの仏教建築に好んでとりあげられたことが、

寺院趾や石窟寺趾の例によって推定され、これがわが国の木造寺院の金堂建築にまで反映していることを見逃してはならない。円蓋形態が天空をかたどって、堂内に宇宙的空間を出現させるために最も重要な要素と見なされるからである。そこで、折上げ天井という架構を工夫して、円蓋をかたどり、穹窿天井をかたどるのである。ところで、長方形のプランに半円筒穹窿を架す石造または煉瓦造建築は、外形は単層ですが、イラン式の方形円蓋建築は、四壁に円蓋形をのせて円蓋を架すから、外形は二段階の重層建築になる。

法隆寺金堂は内部は第一層ですんで、第二層は不必要なのだが、外観は重層である。ところが、後代の唐様(禪宗様)仏殿は、外観も重層なら、内部もまた重層で、四本の太柱を立てて、高い天井の円形鏡板を支え、二階天井まで突き抜いた高い空間を作って、斗拱群・支輪群の上昇効果と相まって、宇宙像をかたどるところはみごとである。とにかく、法隆寺金堂の重層形式は、円蓋建築の祖形から発したものである。

秩序とリズム 法隆寺の金堂も五重塔・中門も、雲肘木を用いてい

るので、外観はなにか繁雑で古式に見えるが、構造は三斗組の簡單明快な建築である。この明快さは、浅野清氏が指摘されているように、金堂や五重塔の各部の比例の明確さによく現われ、回廊のうちに堂・塔をおさめる位置も、数値的に考えられている。こういう数的な明快さは、やはり白鳳彫刻に見る明朗な表情、簡潔な形態と共通するところである。

法隆寺の回廊のなかに立って、この並立する塔と金堂の整頓された姿を眺めるとき、整数的な秩序に打たれるとともに、回廊の列柱が空間に刻むリズムの美しさを感じる。円柱が、この建築においていかに大きな役割を演じていることか。構造上の重要さはもちろんだが、建築の表現上にもまた大切な要求である。

(つづく)

(筆者著書「日本の美術1 日本美術入門」監修/亀井勝一郎・高橋誠一郎・田中一松、1966、再版1980年、平凡社、より)

本書の英訳本『Major Themes in Japanese Art』translated by Armins Nikovskis, 1976, Weatherhill, New York)

法隆寺金堂

